

磐城新聞

定価(郵税別) 一月三錢、三月九錢、半年一圓七錢、一年三圓二錢
廣告料(別所指定) 一頁一圓、二頁一圓二角、三頁一圓五角、四頁一圓八角、五頁二圓、六頁二圓二角、七頁二圓五角、八頁二圓八角、九頁三圓、十頁三圓二角

長平地蔵の由来 (一)

小名濱 栗田 穂秋

機は訪れた。果然三百年間の迷夢を破つて國民一齊、幕政轉た長し水運の眠、昏々として眠れる民衆に血涙淋漓として、自覺奮發を促したるは、建國理想の實現を願ひ給へる聖天子明治大帝の御出現であつた。即ち明治の時代は、過去の歴史を清算し、未來萬年の歴史の門出に當る偉大なる洪業の機運である。

この尊貴なる歴史に、不憚身を奮ひ、憂國の志士の飛躍の裏面には、幾多の剣侠に因り奇しき犠牲の譚が秘められてある事、こゝに草せんとする譯りもやである。

この詩境の關を名残り惜しむる君の爲の日の本、爲の身、爲の毛に輕んじた正義の志士の涙史であらねばならぬ。

政權返還の輿論漸くかまびすし頃、奥羽一帯の城主は盟結して不發を稱へ、遂に官軍をして征討の途に就かした。その軍の一隊を率ひる正原の志士、出生は肥後の熊本、姓は不詳名で長平と呼ぶ中年の武士が、

無念の齒、萬斛の泪を呑んで敗走した。何處へ、何處へ、日々の快は報と、偉大な反省と自覺を、長平の許へ傳達された。君が起せしめた事だらう。その御威津の旗風に、今はなした彼の論戰機身の半生、ひかぬもなかつた。凱歌に次で、遂に彼は官軍の旗を、風涼しき小名濱の陣地に戦を提げて立つ身となつた。

云ふべきは言ひ盡した。もうこれからは言ひ盡した。陣屋の物見からは小名濱に掛らなければならぬ。西郷熊本を旅立つ時、能の袋給が限り繰り繰り本城天守閣を眺め、心の中に人知れぬ誓ひを、旅、朝の武藏野、晝の海、夕べの水戸の梅郷と、飽かぬ想を想はせる御威津の旗の眺め絶景に打ち、漸速な歩みは續けられた。

を千世の前のにおいた。これはいつもながら妙信どのの心づくし辱けなう存じますぞえ。

妙信尼は思ひやうやうに云つた。

「いゝな近頃では淋しさに別れまされたので左程は心も寂しませんが……」

妙信尼は思ひやうやうに云つた。

「いゝな近頃では淋しさに別れまされたので左程は心も寂しませんが……」

妙信尼は思ひやうやうに云つた。

「いゝな近頃では淋しさに別れまされたので左程は心も寂しませんが……」

妙信尼は思ひやうやうに云つた。

「いゝな近頃では淋しさに別れまされたので左程は心も寂しませんが……」



高橋柳太郎創作
布施平八郎挿繪

「お、妙信殿、ようこそ」

「お、妙信殿、ようこそ」

「お、妙信殿、ようこそ」

「お、妙信殿、ようこそ」

「お、妙信殿、ようこそ」

「お、妙信殿、ようこそ」

「お、妙信殿、ようこそ」

「お、妙信殿、ようこそ」

「お、妙信殿、ようこそ」

「お、妙信殿、ようこそ」

磐城病院
電話一四四番

平町通

藤沼醫院
電話五〇七番

平町通

診察 無料

如何なる重患でも直ちに癒る三丁目
の大谷へ御出下さい

院長 博士 敬白

大谷時計病院
電話一九九番

深キ經驗ト
正シキ學理ヲ基トシテ
最新ノ設備ト
優秀ナル技巧ニ依リ

多産廉賣
萬年瓦

指定品

福島縣 四倉町
萬年瓦株式會社
電話三八八番

道
野草染工場

領受賞等一牌金
町平國城磐

場工染野草
番八四三話電

磐城文化史

本縣東部の歴史制度部を研究し、その結果をこの書に記した。本縣の政治、學者、教育家、陸奥文化研究者、乃至郡町村史(本縣大半郡町村共通)編纂等の唯一なる參考書にして、本書を讀みしめて、純粋磐城の文明及價値を知る能はず、切に本書の必書を薦む。

全一冊、タロース天製、背金文字、箱入、九角五分及五號活字混組、總頁四百八十八頁、貴重圖數十葉入、定價四圓五十錢、書料金二十七錢

縣下各書店販賣殘部少數に付至急申込を乞ふ……

マンチカツ一品
金十五錢

出前も致します
カフェエータヒラ

平町一丁目電話六二〇番

蜂ブドウ酒

歓迎

先づ 獎むるに
蜂ブドウ酒の一杯を以てす
その美味と滋養……
賓客を饗應すに
最も意義深きもの!

三井吳服店
電話三十八番

青沼醫院
電話四〇三番

耳鼻咽喉科專門
大和田醫院
平町南町電一七〇番

入院隨時(自炊の便あり)

秋の御仕度
流行セーブル 新荷着

三井吳服店
電話三十八番

青沼醫院
電話四〇三番

